

# 被災地の現状を歩く 1

高瀬稔彦



絆



クラブの大村裕司さんから『誰か、チャリティゴルフに来ない?』という悲鳴にも似た便りが届いたのを受けて、男気をだして仙台に行くことにした。

到着したその足で、福島県との県境にある山本町の岩佐いちご園にむかう。

向かう道すがら大村さんが説明してくれましたが、高速道路の右(山間部)側と左(沿岸部)で、様子が全く違うのです。そう津波の映像でご覧になった方がいると思いますが、この高速道路、平地に盛り土してつくられたタイプで、波をせき止めた張本人なのです。右側は、宮城産米がたわわに実り、黄金色の絨毯が一面に広がるのに対し、左側は、いまま沼(浸水して水が引かないまま放置された田んぼ)や今後耕作しようと表層を削って脱塩処理中の田んぼばかりで濃茶の世界が広がっていました。骨組みだけ残ったビニールハウスで雑草が生い茂る様子も散見されました。

岩佐いちご園は、昨年岩国みなみクラブでもイチゴを注文した、まさにあのいちごを栽培している農家です。震災前は数百戸の農家がイチゴ栽培をする県内有数の産地だったようですが、いま復旧に向けて、ふたたび立ち上がろうとしている農家は、数戸だけとか・・・ほとんどの方は、今後法人化など組織化した再建を模索されているようです。

岩佐さんは、ご夫婦と息子さんとイチゴを栽培しておられるそうです。

YMCAと岩佐さんとの出会いは地元山本町の社会福祉協議会に仙台YMCAがなにかお手伝いさせてもらうことはないかと相談した時に、壊れた施設の片づけというボランティアで紹介されたことがきっかけだったそうです。きれいなビニールハウスが10数棟立つこのロケーションからは、想像もできませんが、ここも5Mの津波が押し寄せたそうでハウスの骨は折れ曲がり、土地は塩を被り、ひどい惨状だったそうです。



そこに全国からYMCAの若者が集まり、片づけの最中に『もう1回イチゴをつくりませんか』と異口同音に声をかけられたことがご夫婦の背中を押したそうです。息子さんのお子さんが仙台YMCA幼稚園の卒園生だったということもあり、どこの馬の骨ともわからぬYMCAをずっと受け入れることができたのもその活動に理解があった岩佐さんのだからこそですね。絆というか不思議な縁を感じます。農園の人力は、ご夫婦と息子さんだけ。だからYMCAから今度ボランティアが来るだけけど?という依頼があったらそのスケジュールにあわせて、力仕事をいっしょにこなして、再建に漕ぎ着けたそうです。その言葉からはYMCAの若者たちと出逢ってなかったら、もういちど復活させようなどとは考えなかったよという感謝のことばが何回も聞かれました。

被災のはなしで、いちばん印象に残っているのは、『わたしはね、消防団で沿岸警備に出ていたご主人から逃げろ〜!!!という怒鳴り声を聞いて後ろを振り返らず、くるまに家族を載せて、着の身着のまま逃げた。高台に到着して、眼下を見渡すとあたり一面水没していた。皆さんの力があつたから、イチゴ農家は再建できたけれど、ツナミを見てしまった人はね、怖い。再び襲われるんじゃないかと。だから同じ場所で農家を再興しようって気にならないのね。わたしはツナミを見てないから...』

大村さんは、高瀬さんが聞き役に徹したから、いろいろ話をしてくれましたね。あんなにいろいろな話を聞くのは、ぼく(大村さん)も初めてです。と言ってたが、お母さんの話を聞いていたら、興味本位でいろいろなことを聞いたら失礼じゃないかと思うはなしばかりだった。受け止めるだけで精一杯でした。



そんなお母さんが楽しそうに話す瞬間があった。若者との出会いの話だった。帰るときにね、『お母さん、好きな子ができたら、お母さんに会わせにくるね。言ってた子がね、先日彼女だと言っていっしょにボランティアで来たよね』息子や娘がたくさんできたとほんとうにたのしそうに話をしてくれた。  
つづく

今回は、山本町の沿岸部、坂元駅から仙台空港隣接の名取市へ向かいます。

## 編集後記

ずいぶんと寒くなりました。鍋やおでんが食事に登場する機会が多くなりました。みなさんと楽しく食べたいと思います。高瀬さんの旅行記(?)を何回かに分けて掲載します。お土産話もそのうち聞かせてもらいたいです(S)。